

重度障害のある生徒の進路

標題は神戸新聞 2019 年 1 月 6 日朝刊。フェイスブックの投稿で読んだが、多くの人に知ってもらいたいので、図書館で記事をコピーして書き写した。

大阪府枚方市の新居優太郎さん(19)は、府立春日丘高校(茨木市)の定時制課程 4 年生。ベッドの脇で「取材に来ました」と言うと、こちらに視線を向け、パチッとまばたきしてくれた。「了解」の意味だ。生まれた時に十分な酸素が脳に行き届かず、生死の境を幾度もさまよった。人工呼吸器に加え、チューブで栄養剤を胃に注入する「胃ろう」、たんの吸引、移動のためのストレッチャータイプの車いすが必要。コミュニケーションは問い掛けに「はい」はまばたき、「いいえ」はまばたきしないという手段に限られる。小学生時代は遠くの特別支援学校に通ったが、母親の真理さんは、体力もついで学習意欲もある優太郎さんを地域の中学校に進学させようと決意。真理さんは息子を「優太郎さん」と呼ぶ。「ゆうちゃんって感じじゃなくて。頑固で手厳しく、しっかりとした性格」と笑う。中学校では、人工呼吸器をつけた生徒は初めてという教職員と気持ちが擦れ違い、何度も衝突しては話し合いを繰り返した。ところが毎日過ごす中で同級生たちはすっかり慣れ、車いすを押したり、一緒に行事に参加するにはどうしたらいいのかを考えたりするように。年を経るごとに真理さんの付き添いは減り、3 年生で付き添う必要がなくなった。優太郎さんは「地域の方が楽しい。みんなと同じように高校に行きたい」と意思表示したという。

受験には問題の代読、代筆、まばたきの意思表示を確認する教師、看護師の配置などの配慮を府教育庁に申請。一般選抜は前後期日程とも不合格だったが、面接のみの 2 次選抜で合格した。同庁によると、少なくとも過去 10 年、府立高校の定員割れでの不合格は出ていない。高校では、皆と同じ教室で授業を受け、その内容や進行に特段の配慮はない。ただ、元教諭の学習支援員が付き添い、代筆などをしてもらう。トイレや移動は介助員が支援。胃ろうの管理、たんの吸引などは看護師が担う。2 年時の宿泊学習、3 年時の修学旅行にも親は付き添わず、一般家庭での民泊も体験した。

一番の楽しみは放課後の部活動、科学部だ。理系が好きな優太郎さん。後輩から「優太郎さん」、同級生からは「ゆーたろー」と呼ばれ、アイデアを出し合ったり、実験をしたりと忙しい日々を送る。無欠席で通学する優太郎さんは、課題もこなして進級してきた。同校の平岡香子准校長は「障害の状況に即して指導目標を設定し、それに照らして学習過程や成果を多角的、総合的に評価している」と説明。看護師らの配置は本人が学校生活を送るために必要不可欠な配慮との考えで、「学校として障害があることを理由に何ら特別扱いはしていない」と強調する。真理さんは「学校では友達と触れあい、社会性を学んでいる。意思表示もはっきりし、表情も豊かになった。生きる力が学校でついたと感じている」と話す。



(2019 年 2 月 18 日)